

# 伊達政宗と能役者

# 名人桜井八右衛門安澄

名掛丁東名会 梅津恵一

江戸時代に政宗、忠宗、綱宗、綱村の伊達家の四代に渡って活躍して名人と称せられ、将軍家にも召し抱えられた能楽師、桜井八右衛門安澄のお墓が榴岡の孝勝寺の境内にひっそりと建っている。

戦国時代、信長や秀吉は公家や諸大名との外交手段として、また己の文化水準の高さを誇示する手段として能楽を大事にした。江戸時代に入ると能楽は茶の湯と同様に、大名同士の交際に欠くことのできないものになっていた。誰かをもてなす場合にも、もてなしを受ける場合にも、能楽、茶の湯、酒宴は必須のもので、他の大名に誇れる能役者を抱えておくこと、さらに藩主自らも技を鍛錬することを求められた。政宗も例外ではなく、年少の頃から能楽を大変好んだ。自らも太鼓を得意とし、1596年に京都伏見の伊達屋敷で開かれた能演では徳川家康、前田利家同席の元で、能に夢中になっていた秀吉（61歳）は「老松」を舞い、政宗（30歳）が太鼓を打った。

政宗は「平家物語」などに材を取った「修羅物」を好んで鑑賞し、涙を流していたと言う。能には死者を弔う神事のような精神性と人生の喜怒哀楽がすべて詰まっていると言う。度重なる戦で殺戮を経験し、激動の時代を生きた政宗は能の舞台に自分の人生を重ね合わせたのだろう。

政宗は四座（観世、金春、宝生、金剛）一流（喜多）のシテ五流の中で特に喜多流と金春流に親しんだ。1609年には14歳の家臣桜井八右衛門安澄を奈良の金春流宗家に派遣し、10年間修行させて、一流の能役者に育て上げた。八右衛門安澄は幼名を小次郎といい、生家は平井氏で織田の家臣であったが、信長の死後父庄右衛門は奥州にくだり、家老屋代景頼の推挙で政宗に仕えた。この時に姓を母方の桜井氏に改めた。小次郎はその長子で政宗に奥小姓として仕え、その才能を買われたのだった。小次郎の芸筋は天才的で、1613年3月、政宗が江戸桜田藩邸に幕府の老中、諸大名を招待した時の能演で、17歳の小次郎は師の金春安照と観世の家元黒雪の二人の名人と立ち合い能を演じて、その場に居合わせた人々を驚かした。1634年には政宗は将軍家光が上洛した際に随行し、京都三条塩屋町の藩邸で近衛信尋を能演でもてなした。そこで信尋は八右衛門を激賞し、その推挙で光栄にも後水尾天皇の天覧能が実現し、おかげで政宗は武将としての器量だけでなく、文化人としての才覚も世に広く知れ渡ることとなった。



宮城野区榴岡 孝勝寺（写真提供 梅津氏）

政宗に育て上げられた八右衛門は、その後も能楽界の第一人者として活躍し、四座一流の家元で右に出るものはいなかった。江戸城の舞台で将軍がシテにアンコールを命じることを「御乞能」と称し最大の名誉としたが、万治から寛文にかけての「御乞能」は八右衛門が独占した。1665年には四代将軍家綱に召し抱えられて江戸定詰めとなり、素人上がりの能楽師として、最高位の座に着いた。

そのために当然のごとく他の恨みを受けた。これについては有名な逸話がある。ある時、江戸城の上覧能に道成寺を舞い、鐘入りをした後シテに出る時、鐘の中に故意に般若の面を備えてなかった。彼を失脚させるための策略である。八右衛門は少しも狼狽せず、指を噛み、流れる血でヒタ面に般若を描いて現れたので、その憤怒の形相に鬼気真に迫るものが満場に満ち溢れたと言う。

八右衛門は1667年9月、高齢を理由に将軍家綱に引退を申し出、江戸城で黄金三枚、時服三重を拝領して仙台に帰った。そして、3年後の10月16日に本荒町（南町中央郵便局付近）の屋敷にて73歳の生涯を閉じた。59年間にわたる華々しい舞台人生であった。

孝勝寺に八右衛門は手厚く葬られたが、そのお墓は何時しか忘れ去られ、その存在を知る人すらも亡くなっていた。それを郷土史家の故三原良吉さんが1951年2月に、孝勝寺墓地内の荒れ果てた藪の中に、半ば土に埋もれて仰向きに倒れているお墓を発見した。本寿院秀覚日要居士の法名もこの時初めて判明した。これを機に仙台能楽協会の手でお墓を建て直して記念碑を建てて、同年本堂にて盛大な追善素謡会が行われた。

この話は三原良吉さんが私の大叔父の親友であったことから、縁あってその著書が私の手元に数冊あり、その中から見つけたものである。興味をそそられて早速、私も孝勝寺に足を運んでみた。この界限は1979年に施工された仙台市の区画整理事業によりすっかり変わってしまっていて、墓地の区画も整備されていた。広い敷地の中でやっとお墓を見つけたが、長い年月の経過で、墓碑銘も指でなぞってどうにか読み取れるほどであった。庫裏をたずねてご住職に八右衛門の墓について伺うと、三原良吉さんのことも良くご存知で、当時のことを懐かしそうに語ってくださり、数年前にも本堂で追善の能演が再度、盛大に開催されたそうだ。

東口は仙台市の再開発事業で古い町並みも人の生業も一掃されてしまったが、思わぬところに伊達62万石の御威光を示す歴史が潜んでいる。孝勝寺はその歴史の宝庫だ。興味のある方は是非、探索なされることをお勧めしたい。



桜井八右衛門安澄の墓（写真提供 梅津氏）

参考文献 『郷土史 仙台耳ぶくろ』三原良吉/著 宝文堂 1982.11  
『宮城縣史 14 学能、文芸』より「能」/三原良吉 財団法人宮城縣史刊行 1987

関連資料 『面からたどる能楽百一番』三浦裕子/文 神田佳明/写真 淡交社 2004.10  
『上方伝統芸能あんない』堀口初音/著 創元社 2011.10  
『伊達政宗 秀吉・家康が一番恐れた男』星亮一/著 さくら舎 2014・9